東晋の登山詩 ―― その背景

長谷川　滋成

山 ―― 仁者の楽しむ所

東晋時代になると、「石鼓を観る」「楚山に登る」「衡山」「従征して方山の頭に行く詩」「会稽の刻石山に登る」「諸兄弟と方山に別るる詩」「白鹿山の詩」「荆山に登る」など山の名を詩題にすえたり、山に登ったりする詩が目立つようになるが、中国では古くは山はどのようなものとしてとらえられていたのであろうか。本稿では山の詩が作られるに至る背景を探ることにする。

山は地形的には、

夫れ山は土の聚まれるなり。（『国語』周語下）

石有りて高し。（『説文解字』巻九下）

とあるように、高くて土や石のある所。語義的には、

山は産なり。生物を産するなり。（『釈名』釈山）

山は宣なり。能く气を宣散して万物を生ずるを謂ふなり。（『説文解字』巻九下）

とあり、気を散じて万物を生み出すものという。また『韓詩外伝』（『初学記』巻五）に、

夫れ山は万人の瞻仰する所。材用は焉に生じ、宝蔵は焉に植ゑ、飛禽は焉に萃り、走獣は焉に伏す。群物を育て倦まざるは、夫の仁人志士に似たる有り。是れ仁者の山を楽しむ所以なり。

とあり、『尚書大伝』（『大平御覧』巻三八）に、

孔子曰はく、夫れ山は嵬嵬然たり。草木は焉に生じ、鳥獣は焉に蕃し　財用は焉に殖す。四方皆な焉に私与すること無し。雲雨を出だして以って天地の間に通ぜしむ。陰陽は和合し、雨露の沢あり。万物は以って成り、百姓は以って饗く。此れ仁者の山を楽しむなり。

とあるのは、山と人との関係を説くものである。

山が人々に仰ぎ見られるのは、高いということだけではなく、仁人・志人と同じように万物をたえず育て、天地間にゆきわたる公平無私な自然の恵みによって、人々が恩恵を蒙るからである。だから山は仁者の楽しむ所となる。楽しむことは知ることや好むことよりも、高い境地である。

山は仁者の楽しむ所―こういう受けとめ方はいつごろからはじまったのであろうか。『論語』雍也篇に「子曰はく、知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむと」とあるのによれば、孔子の時代にはすでにそう受けとめられていたとみてよい。仁者が山を楽しむことについて、何晏は「仁者は山の如く安固なるを楽しむ。自然は不動にして万物焉に生ず」といい、朱子は「仁者は義理に安んじて厚重、遷らざることと山に似たる有り。故に山を楽しむ」という。これによると、仁者は義理に安住し、そのさまは安定・堅固・不動・厚重であるゆえに、仁者が楽しむものは自ずとそれを持しているもの、ということになる。それが山だったのである。従って孔子が山を楽しむというのは、仁者と同じ性向を持している山の、そういう価値や能力を楽しむというのであって、それを求めて山に入り、山の美しさや山中の生活を楽しむ、といっているのではない。

名山――仙人の居所

孔子の編といわれる『詩経』にも山がある。しかし水に比べるとかなり少ない。これらの山は楽しい所としてではなく、苦しい所として多く用いられている。たとえば次の詩句である。

陟彼砠矣　彼の砠に陟れば
我馬瘏矣　我が馬は瘏れたり
我僕痡矣　我が僕は痡れたり
云何吁矣　云で何ぞ吁ふ　（周南・巻耳）

留守居の妻が石の多い山に陟って、馬も馭者も疲れきっていることを詠う。

陟彼岵彼兮　彼の岵に陟りて
瞻望父兮　父を瞻望す
父曰嗟予子　父曰ひき嗟予が子よ
行役夙夜無已　行役しては夙夜已むこと無く
上慎旃哉　上はくは旃を慎めよ
猶来無止　猶ほ来たれ止まる無かれ（魏風・陟岵）

出征兵士がはげ山に陟り、自分を送り出してくれた父の励ましや慰めの言葉を思い出して詠う。

我徂東山　我は東山に徂き
慆慆不帰　慆慆と帰らず
我来自東　我東自り来たれば
零雨其濛　零雨は其れ濛たり
我東曰帰　我は東にて帰ると曰ひ
我心西悲　我が心は西に悲しむ　（豳風・東山）

東方の山へ徂き、久しく帰れなかった兵士が雨の中を帰還する苦しみを詠う。

これらの山とは趣きを異にする山がある。終南山である。

終南何有　終南には何か有らん
有条有梅　条有り梅有り
君子至止　君子は至りぬ
錦衣狐裘　錦衣に狐裘

顔如渥丹　顔は渥丹の如し
其君也哉　其れ君なる哉　（秦風・終南）

君子つまり秦の君主が到着した終南山は苦しい所ではなく、「儀貌尊厳」（鄭箋）な君主にふさわしい山であり、「周の名山の中南」（毛伝）なのである。

終南山は周代の名山というが、名山とはどんな意味あいを持つのであろうか。『辛氏三秦記』（『太平御覧』巻三八）の、

太一は驪山の西に在り。長安を去ること二百里、山の秀なる者なり。

によると、秀なる山のことである。

名山の古い例と思われる『関令尹喜内伝』（初学記』巻五）には、

五百歳に天下の名山一たび開く。開く時、金玉の精涌出す。

とある。五百年に一度、金玉の精が涌き出る、それが名山である。神秘的な山である。

『史記』巻二八封禅書には次のようにある。

天子は天下の名山大川を祭る。

天下の名山は八あるも、三は蛮夷に在り、五は中国に在り。中国は華山・首山・太室・泰山・東萊、此の五山は黄帝の常に游び、神と遇ふ所なり。黄帝は且つ戦ひ且つ僊を学べり。

黄帝がいつも遊んで神に会い、仙術を学んだ所、それが名山である。

また『抱朴子』自叙篇には次のようにある。

未だ松・喬の道を修するに若かず。我に在る而已、人に由らず。将に名山に登り、服食し養性せんとす。（中略）乃ち嘆じて曰はく、山林の中には道無きなり。而るに古の道を修する者、必ず山林に入るは、誠に讙譁より違遠するを以って、心をして乱れざらしめんと欲すればなり。今将に本志を遂げ、桑梓を委てて嵩岳に適き、以って方平・梁公の軌を尋ねんとす。

赤松子・王子喬は古代の仙人。王方平は後漢の仙人。梁公は未詳。嵩岳は嵩高山で五岳の一つ。葛洪は名山に登り、道を修した昔の仙人に倣って、服食し養性したいという。

登渉篇にはまた次のようにある。

凡そ道を為し薬を合はせ、及び乱を避けて隠居する者、山に入らざるは莫し。然るに山に入る法を知らざる者は、多く禍害に遇ふ。（中略）乱世を避け、迹を名山に絶ち、憂患無き者は、上元の丁卯の日を以ってす。（中略）僊道を求めて名山に入る者は、六癸の日・六癸の時を以ってす。

仙道を求めたり、薬を調合したりする時には名山に入り、また戦乱を避けて隠居する時もそうしたのである。

名山には仙草・奇薬が多かった。

名山には神芝不死の薬を生ず。（『博物志』巻六）

名山の奇薬を尋ね、霊波を越えて轅に憩ふ、石上の地黄

を採り、竹下の天門を摘む、曾嶺の細辛を撫ひ、幽澗の渓蓀を抜く、鍾乳を洞穴に訪ひ、丹陽を紅泉に訐ぬ。（謝霊運「山居の賦」）

「山居の賦」は東晋以後のものであるが、その自注には「此れ皆な年を住むるの薬、近山の出だす所にして、采拾して以って病を消さんと欲する有り」という。

無名氏の『名山記』『名山略記』、謝霊運の『遊名山志』、都穆の『遊名山記』などはこうした山々に関する書物と見てよかろう。

以上によると、名山とは仙薬・仙草があり、仙術を修得し、仙人の棲み家となる所である。とすると、名山といわれる終南山もこのような山ではなくてはならない。前掲の『辛氏三秦記』には続けて次のようにいう。

中に石室有り。常て一道士有りて、五穀を食らはず、自ら太一の精と言ふ。斎潔すれば乃ち之を見るを得。其の状は仙人に似たり。山は一に地肺と名づく。洪水を避くべし。俗に云ふ、上に神人有り。舡に乗りて行き、之を追ふも及ぶべからず。

また皇甫謐の『高士伝』（『初学記』巻五）には、

四皓の綺里季等、共に商洛に入り、地肺山に隠れて、以って天下の定まるを待てり。漢の高祖之を徴すも至らず。乃ち深く自ら終南山に隠る。

とあり、崔鴻の『前秦記』（『初学記』巻五）には、

王嘉は五穀を食らはず、清虚服気す。潜かに終南山に隠れ、独り廬を菴して止まる。

とある。これらによると、終南山には五穀を食わぬ名の知れぬ道士や王嘉、あるいは高祖の招聘を辞した四皓がおり、彼らの住となる石室や食となる霊芝があった。まさに名山である。

名山とは称されないが、蓬萊山・方丈山・瀛洲の三神山も実質的には名山である。

威・宣・燕・昭自り、人をして海に入り蓬萊・方丈・瀛洲を求めしむ。此の三神山は、其の伝ふるに渤海中に在り。（中略）蓋し嘗て至る者有り。僊人及び不死の薬は皆な焉に在り。（中略）臣（李少君）嘗て海上に游び、安期生を見る。安期生は巨棗の大いさ瓜の如きを食らはしむ。安期生は僊者、蓬萊中を通る。（『史記』巻二八封禅書）

こうした名山は以下に挙げる泰山・天台山、さらには華山・衡山・嵩高山・崑崙山・廬山・鍾山・九疑山・石鼓山等々、その数は決して少なくない。

道士――真人・仙人・沙門

ところで道士とはどのような者をいうのであろうか。『大霄琅書経』（『初学記』巻二三）にはいう。

人　大道を行ふ、号して道士と曰ふ。士とは何ぞや。理なり、事なり。身心　理に順ふは、唯だ道に是れ従ふのみ。道に従ふを士と為す。故に道士と称す。

大道を行い、道に従う者、それが道士である。ここにい

う道とはどのような道をいうのであろうか。

結論を先に言えば、道士には三様の言い方があるようである。一つは老荘思想の道に志す者、その体得者、これを以下真人という。[注5] 二つは神仙の道に志す者、その体得者、これを以下仙人という。三つは仏の道に志す者、その体得者、これを以下沙門という。

一つめの真人については、郭璞の「遊仙詩七首」其の二の「青谿は千余仞、中に一道士有り」に注する胡紹瑛が、

古は皆な道士を以って有道の士と為す。新序の節士篇に、介子推曰く、謁して位を得るは、道士居らずと。是なり。

（『文選箋証』巻二二）

というのがそれである。『新序』節士篇の道士は、続く文に「争ひて財を得るは、廉士受けざるなり」とある廉士と同人である。従って、この道士は真人とみてよかろう。また、『困学紀聞』巻二〇には『新序』節士篇と『漢書』巻七五京房伝を挙げる。京房伝の用例は「道人始めて去るとき、涌水を寒えしめ災を為す」をさすのであろうか。その顔師古注には「道人は道術有るの人なり」という

二つめの仙人について、胡紹瑛はまたいう。[注6]

後乃ち仙隠の称と為す。（中略）漢の郊祀志の漢宮閣疏に[注7]云ふ、神明台は五十丈、上に九室有りて菅に九天道士百人を置くと。蓋し武帝自り始まりしならん。

胡紹瑛によると、道士は古くは有道の士（真人）に用いたが、漢の武帝以後、仙隠（仙人）の呼称となったことがわかる。従って胡紹瑛は次の資料を「穆王・平王の事は考ふべからず」として、否定する。

周の穆王は神仙を尚ふ。尹真人の楼観に草制するに因り、遂に幽逸の人を召し、置きて道士と為す。

平王の洛邑に東遷するや、又道士七人を置く。（『初学記』巻二三所引『楼観本記』）[注8]

因みに『太平御覧』巻六六六に引く次の道士は、漢以後とは限らない。

劉翊、字は子相、後漢の人なり。世〻潁川に居る。家富み貧を済ふを以って事と為す。陳留太守と為りて後、官を去る。山に入りて道士と為る。

淳于斟、字は叔顗、会稽の人なり。漢の桓帝の時、県令と為る。山に入りて道を修す。

劉寛、字は文饒、後漢の南陽太守。年七十三、華山に入りて丹棗を服す。（以上『真誥』）

蔣負芻は義興の人なり。晋陵の薛彪之と俗外の交を為す。茅山に去来し、栖託を志す有り。斉の永明中、暫く都に下り、陶隠居と一遇し、便ち素契を尽くす。陶後に綬を解き、宇を中茅に結ぶ。仍りに負芻に請ひ嶺を度る。経典薬術に就き、常に共に之を論ず。

許邁、字は叔玄、少名は映、後に名を遠遊と改む。仙道を求むるを志し、臨安の西山に入り、月を経るも返らず。亦た其の之く所を知らず。

龍威丈人は、山中にて道を得たる者なり。時人其の名を

知る莫し。号して山隠居と曰ふ。傲然として群せず、高く人の世を絶つ。(『太平経』)

また『列仙伝』には次のようにある。

王子喬は周の霊王の太子の晋なり。(中略) 伊・洛の間に遊び、道士の浮丘公は接するに嵩高山に上るを以ってす。稷丘君は太山の下の道士なり。主柱は何所の人なるかを知らざるなり。道士と共に宕山に上る。山図は隴西の人なり。(中略)道人を追ひ之に問ふ。能く吾に随はば、汝をして死せざらしめんと。朱璜は広陵の人なり。少くして毒痕を病み、睢山の上の道士の阮丘に就く。丘は之を憐みて言ふ、卿 腹中の三尸を除けば、真人の業有り、度教すべしと。

これらの道士はみな山に入っている。その山は名山で、そこで服食養生し、神仙の道を修している。しかし道士はその名山を美しいとは感じていない。

なお、仙人の意の道士(注9)は、前掲の『辛氏三秦記』では神人とも太一の精ともいわれており、また右の『列仙伝』では道人とも真人ともいわれている。

三つめの沙門の道士は、『太平御覧』巻六六六には見えず、『世説新語』に見える。ただし道士ではなく、道人として見える。

林道人　謝公に詣る。(文学篇) 林道人は『高僧伝』巻四に伝がある。謝公は謝安。

高座道人　漢語を作さず。(言語篇) 高座道人は『高座別伝』(言語篇注所引) に伝がある。

竺法深　簡文の坐に在り。劉尹問ふ、道人何を以って朱門に游ぶやと。(言語篇) 竺法深は『高逸沙門伝』(言語篇注所引)、『人物論』(文学篇注所引) に伝がある。簡文は簡文帝、劉尹は劉惔。

愍度道人　始めて江を過ぎんと欲し、一の傖道人の侶と為る。(仮譎篇) 愍度道人は『名徳沙門題目』(仮譎篇注所引)、『高僧伝』巻四に伝がある。

殷中軍は廃せられて東陽に徙る。大いに仏教を読み、皆な精解す。唯だ事数の処に至りて解せず。遇〻一道人に見ひて籤する所を問へば、便ち釈然たり。(文学篇) 殷中軍は殷浩。

道人の語は前掲の『漢書』京房伝に見え、そこでは真人のことであったし、また『列仙伝』では仙人のことであったが、東晋のころから沙門のことをいうようになったと思われる。

泰山 ―― 封禅・仙界

ところで五岳の一つで、東方に位置する泰山は無懐氏以下、漢の武帝に至るまで封禅の儀を行った山であると、『史記』巻二八封禅書にはある。封禅を行う所として、なぜ泰山が選ばれたのであろうか。それは由緒ある山だったからである。

泰山巖巖　泰山は巖巖として
魯邦是詹　魯邦是れ詹る　（『詩経』魯頌・閟宮）

泰山は一に天孫と曰ふ。天帝の孫為るを言ふなり。魂を召すを主る。東方は万物始めて成る。故に人の生命の長短を知る。（『初学記』巻五所引『博物志』）

一に岱宗と曰ふ。王者の命を受け姓を易ふるや、功を報じ成を告ぐるは、必ず岱宗に於いてするを言ふなり。東方は万物始めて交代する処なり。宗は長なり。群岳の長為るを言ふ。（『初学記』巻五所引『五経通義』）

泰山は高くて、天帝の子孫で群岳の長、しかも万物が始めて成る東方に位置する山である。そこは土壇を築いて天を祭り、易姓による王者が天下太平を報告する封禅の儀を行うのに最適な山だったのである。

封禅の儀が行われた由緒ある泰山には、

山頂の西巖は仙人の石閭為り。（『初学記』巻五所引『漢官儀』）

泰山には芝草五石多し。下に洞天有り、周廻三千里、鬼神の府あり。（『初学記』巻三九所引『道書福地記』）

とあるように、仙人がおり、仙草・仙薬にも恵まれていたのである。巖巖たる泰山と不老長寿の術を修養する仙人、この二つが結びつくのはごく自然に行われたであろう。

蓬萊山にいた仙人の安期生と通じていたという申公の書には、

封禅するもの七十二王、唯だ黄帝のみ泰山に上りて封ずるを得たり。

とあり、申公の言として、

漢主も亦た当に上りて封ずべし。上りて封ずれば則ち能く僊して天に登らん。（『史記』巻二八封禅書）

が伝えられている。これは泰山と仙人が深く結びついていたことを裏づけるものである。

泰山にいた仙人としては次のような者がいる。

稷邱君は泰山の下の道士なり。漢武　泰山を東巡するに、乃ち琴を擁きて来拜す。

崔文子は泰山の山人なり。黄老を好み、山下に潜居す。黄丸を作りて売薬す。疫気有る者、薬を飲めば即ち愈ゆ。（『初学記』巻五所引『列仙伝』）

処士の張忠は泰山に隠れ、岩に棲み谷に飲む。導養の法を修するに、石を鑿ちて釜を為る。泰山の人、今に于いて之を法とす。（『初学記』巻五所引崔鴻『前秦録』）

道士とも山人とも処士とも呼ばれる仙人は、泰山で長生の薬を作ったり、養生法を修得したりしているが、これについては『抱朴子』に詳述されている。

巖巖たる泰山は楽しい所ではなく、世俗から隔絶された苦しい所であり、だからこそそこが仙人の修養にふさわしい所として選ばれたのであろう。

さて仙人といえば、風雨や白雲や雲気がつきものだが、それは仙人が生来的に有していたのではなく、『尚書大伝』にあったように、山はそもそも雲や雨を出す所であり、封

禅の際にも生じた。たとえば、

皆な泰山に至りて后土を祭る。封禅の祠、其の夜には光有るが若く、昼には白雲の封中に起こる有り。（『史記』巻二八封禅書）

光武　泰山に封ず。雲気　宮闕を成す。（『太平御覧』巻三九所引袁山松『後漢書』）

とあるのがそれである。また、五岳や西王母のいる崑崙山、安期生、負局先生のいる三神山には雲や雨や風があった。

五岳は皆な石に触れて雲を出だす。膚寸にして合し、朝を崇へずして雨ふる。（『芸文類聚』巻一所引『尚書大伝』）

崑崙山には五色の雲気あり。（『芸文類聚』巻一所引『河図』）

未だ至らざるに、之を望むこと雲の如し。到るに及べば、三神山は反って水下に居る。之に臨めば、風は輒ち引き去り、終に能く至るもの莫しと云ふ。（『史記』巻二八封禅書）

雲・雨・風が仙人と結びつく事例も少なくない。

赤松子は神農の時の雨師なり。（中略）帝は西王母の石室中に止まり、風雨に随ひて上下す。

赤松子輿は黄帝の時の人なり。（中略）能く風雨に随ひて上下す。

涓子は斉の人なり。（中略）宕山に隠れ、能く風雨を致せり。

師門は嘯父の弟子なり。（中略）一旦風雨ありて之を迎ふ。（以上『列仙伝』巻上）

葛玄は車に乗りて過ぎ下りず。須臾にして大風廻りて玄の車を逐ふ有り。塵埃は天に漫り、従者皆な辟易す。玄乃ち大いに怒りて曰はく、小邪敢へて爾るやと。即ち手を挙げて風を止むれば、風便ち止む。（『神仙伝』巻八）

千載　世を厭ひ、去りて上僊す。彼の白雲に乗りて、帝郷に至れば、三患至る莫くして、身常に殃ひ無し。（『荘子』天地篇）

以後これらの語は仙人と深く結びつき、仙人を象徴する語となり、魏晋の「遊仙詩」には頻りに用いられた。

ついでにいえば、稷邱君が漢の武帝に拝謁したとき持っていた琴もまた、仙人を象徴するものである。

務光は夏の時の人なり。耳の長さは七寸。琴を好み、蒲・韮の根を服す。

琴高は趙の人なり。琴を鼓くを以って宋の康王の舎人と為す。

寇先は宋の人なり。（中略）数十年して宋の城門に踞し、琴を鼓くこと数十日、乃ち去る。（以上『列仙伝』巻上）

天台山 ―― 仙人・沙門

会稽の天台山も例にもれず、高くて世俗から遠く隔絶された所にあった。

天台山は超然として秀出せり。山に八重有り、之を視ること一帆の如し。高さ一万八千丈、周廻八百里。（『太平

御覧』巻四一所引『臨海記』）

会稽の天台山は遐遠にして、生を忽せにし形を忘るるに非ざる自りは、躋ること能はざるなり。（『太平御覧』巻四一所引『異苑』）

物と我との区別を忘れ、無為自然の道を悟らなければ、天台山に登ることはできない。天台山は天台宗の聖地として知られているが、そもそもは仙人がいた所である。

天台山は剡県に在り。即ち是れ衆聖の降る所にして、葛仙公の山なり。（『芸文類聚』巻七所引『名山略記』）

天台山は人を去ること遠からず。（中略）上に瓊楼・玉閣・天堂・碧林・醴泉有りて、仙物は畢く備はる。晋の隠士の白道猷　之を過ぐるを得るに、醴泉・紫芝・霊薬を得たり。（『太平御覧』巻四六所引『啓蒙記注』）

余姚の人の虞洪は山に入りて茗を採るに、一道士の三青羊を牽くに遇へり。洪を引き天台の瀑泉に至りて曰はく、吾は丹丘子なりと。（『太平御覧』巻四一所引『神異経』）

また後漢の明帝の永平五年（六二）、劉晨・阮肇の二人が天台山に入って迷い、桃の実を食べて飢えをしのいでいたところ、山中で出会った二人の女に厚くもてなされ、半年後帰郷してみると、この世は七代も経っていた（『太平御覧』巻四一所引『幽明録』）という話も、仙界のことである。

ところで天台山が北方の三神山に匹敵する、いわば名山であると主張したのは「天台山に遊ぶの賦」を著した東晋の孫綽である。

天台山は蓋し山岳の神秀なる者なり。海を渉れば則ち方丈・蓬萊有り、陸に登れば則ち四明・天台有り。皆な玄聖の遊化する所、霊仙の窟宅する所なり。

天台山には玄聖・霊仙のいる神秀なる山岳で、三神山どころか、五岳にも匹敵するが、五岳にも名を列ねず、経典にも名が載らないのは、あまりにも絶域にあるからである。

五岳に列せず、常典に載するを闕く所以の者は、豈に立つ所の冥奥にして、其の路の幽迴なるを以ってにあらずや。

絶域にあるために、ここに登ることのできる者は少なく、王者とて神を祭ることはできなかった。しかし全く天台山に登る手だてがないわけではない。

夫の世を遺て道を翫び、粒を絶ち芝を茹らふ者に非ざれば、烏くんぞ能く軽挙して之に宅らんや。夫の遠く寄せ冥かに捜り、信を篤くし神に通ずる者に非ざれば、何ぞ肯て遙かに想ひて之を存せんや。

その手だては二通りあるという。一つは仙人になって軽挙し、天台山に住むこと。粒を絶ち芝を茹らふのは[注10]仙人のすることである。二つは沙門になって想像し、天台山を脳裏に止めること。信を篤くし神に通ずるのはここの表現法から考えて、[注11]仙人のすることをくり返して述べているのでなく、仙人とは違う人のすること、つまり沙門のすることと理解するのがよかろう。

このように考えると、天台山は仙人だけではなく、沙門との関連も浮かびあがってくる。「天台山に遊ぶの賦」に神仙・老荘・仏教の三教融合が見られることは、従来から指摘されていることである。

智顗が天台山[注12]に入って修禅寺を建て天台宗を開いたのは、孫綽の死後およそ二百年経てのことである。以後天台山は天台宗の聖地として名を馳せるようになり、そこにいる沙門を道士という。

山に登る詩 —— 玄言詩

東晋時代の山に登る詩に詠われる山は、そうではない山もあるが、おおむね名山である。その考察は他日に譲るが、庾闡の詩に見える山[注13]についてはすでに考察した。

東晋時代の南方の山は、『詩経』以来の北方の山とは違っていたと思われるが、名山といわれる山は高くて、世俗から遠ざかった所にあった。人々はそこに登って、仙人の営みをする者もいたし、仙人気どりでその雰囲気に浸る者もいた。

こうした傾向は当時の玄言詩と相即不離の関係にあったことは確かである。だがこの時まだ名山に美は発見していないが、後来の山水詩を生み出す下地にはなっていたことも確かである。その意味において東晋時代の山に登る詩は、注目すべき詩の一つである。

（注）

1　子曰はく、「之を知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かずと」（『論語』雍也篇）とある。

2　潘岳の『関中記』（『初学記』巻五）に「其の山を一に中南と名づく。天の中に在り、都の南に居るを言ふ。故に中南と曰ふ」とある。

3　『五経要義』（『初学記』巻五）に「終南山は長安の南山なり。一に太一と名づく」とある。

4　『辛氏三秦記』（『初学記』巻五）には、「中に石室霊芝有り」とある。

5　『荘子』大宗師篇の冒頭に真人に関する論がある。

6　胡紹瑛の説は『困学紀聞』巻二〇に拠っており、「蓋し武帝自り始まりしならん」、「穆王・平王の事は考ふべからず」も『困学紀聞』にある。

7　「神明台・井幹楼を立つ。高さ五十丈、輦道相ひ属く」（『漢書』巻二五下郊祀志下）の顔師古注にある。

8　胡紹瑛は「困学紀聞に云ふ」として、『元和郡県志』『大霄経』を引く。

9　『三洞道科』（『初学記』巻二二）に道士には五種類あるとして、その名を挙げる。

天真道士——高玄皇人・広成子・中皇真人・河上丈人

神仙道士——杜冲・尹軌・赤松子・鬼谷子・安期先生・王方平

山居道士――許由・巣父・王倪・東園公・角里先生
出家道士――宋倫・彭諶・彭宗・王探・封君達・王子年
在家道士――黄瓊・鑒鏗

10 「中に石室有り。常て一道士ありて、五穀を食らはず」（『太平御覧』巻三八所引『辛氏三秦記』）、「王嘉は五穀を食らはず」（『初学記』巻五所引崔鴻『前秦記』）、「赤松子は神農の時の雨師なり。水玉を服す」、「偃佺は槐山の採薬父なり。好んで松の実を食らふ」、「呂尚は冀州の人なり。（中略）沢芝地髓の具を服す」（以上『列仙伝』巻上）とある。

11 「夫の世を遺て――宅らんや」と「夫の遠く寄せ――存せんや」の二文は、表現法からして異なる二つのことをいうのであろう。従って「世を遺て道を翫ぶ者」は「粒を絶ち芝を茹らふ者」と同じで、それは仙人のことをいい、「遠く寄せ冥かに搜ぐる者」は「信を篤くし神に通ずる者」と同じで、それは仏教徒のことをいうと理解する。

12 中村元監修『新仏教辞典』（誠信書房）には「古くから道士・隠士が住し、3世紀～6世紀に清化寺・棲光寺・隠岳寺・中巌寺・白巌寺などが支遁・竺曇猷・僧祐などによって建てられ、幽寂の修行地とされていた」とある。

13 「庾闡の詩」（研文社『新しい漢文教育』第一三号）。

（広島大学）